

講義

地域支援の実際
支援の実践的な枠組みと記録

1

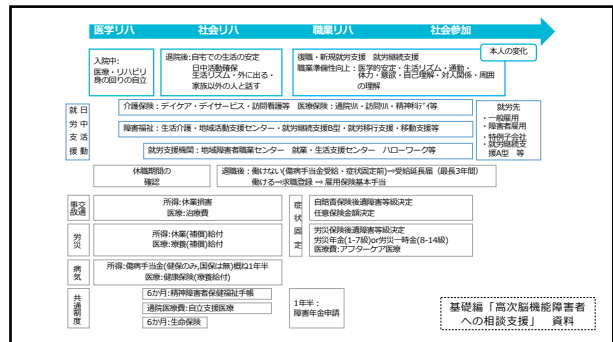
講義の内容

1. はじめに（基礎編の振り返り）
2. サービス提供プロセスと計画等のつながり
3. 地域生活支援の枠組み
4. まとめ

2

1. はじめに（基礎編の振り返り）

3

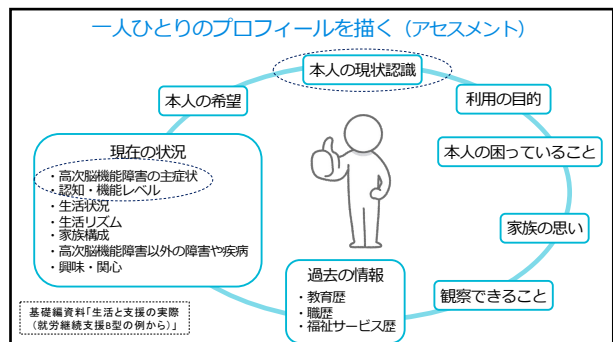


4

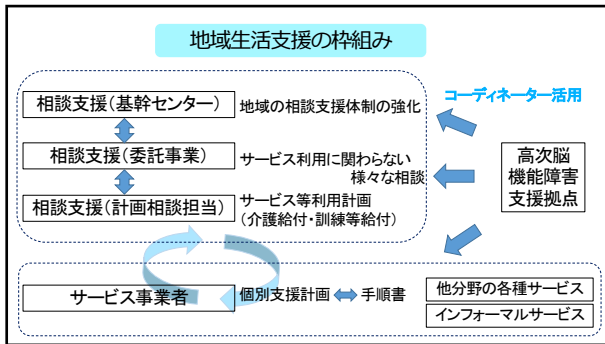
高次脳機能障害者への相談支援を行う際に必要な情報収集を行い、アセスメントを行っていく。その際には「基本情報」「診断名・受傷発症状況」「症状」「生活リズム」「日常生活状況」「住まい」「制度利用」「生活史」を中心に確認するとともに、本人の高次脳機能障害の症状が生活にどのような影響を及ぼすのか、症状に本人はどの程度気づいているのか、就労を希望している場合には仕事に就く上での準備が整っているのか、を確認することがポイントとなる。

基礎編資料「高次脳機能障害者への相談支援」

5



6



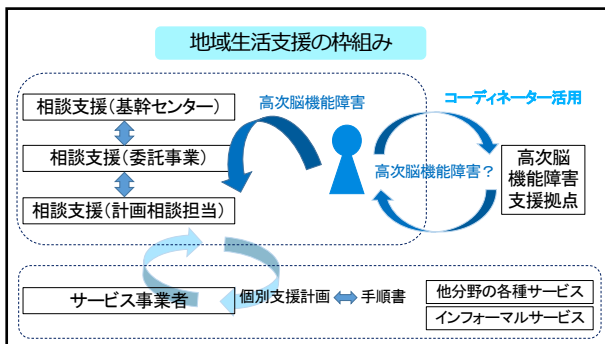
25

「一次キャッチ」のポイント

- ・外傷性脳損傷（交通事故）や脳血管障害のエピソード
- ・高次脳機能障害の特性が見受けられる
注意障害、記憶障害、遂行機能障害
社会的行動障害
- ・本人に自覚はないが、家族や職場関係者が困っている
（「性格が変わった」「別人のように…」）
- ・精神科にかかって投薬しているが、何かしっくりこないなど

* 高次脳機能障害支援モデル事業 2001年（平成13年）～ ⇒ 知らないまま？
* 他の障害の特性との重複、類似

26



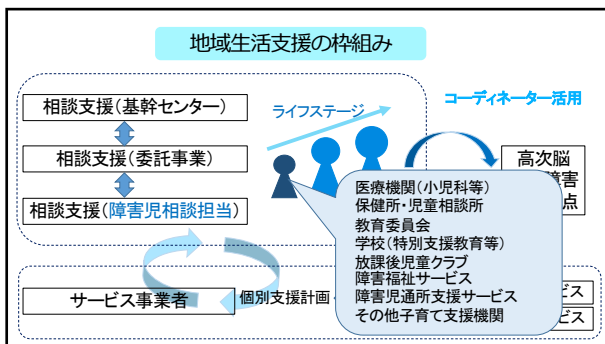
27

ライフステージの視点

- ・高次脳機能障害は、成人のイメージが強い
「高次脳機能障害及びその関連障害に対する支援普及事業」
→ 生産年齢層（15歳以上65歳未満）が多い印象
→ 発症前にいかに戻るかというイメージ
→ 治療～リハ～生活訓練～就労支援…
- ・ただ、例えば交通事故に遭う可能性は子どもでも高齢者でもある
【子ども】 親の養育観の理解、発達段階に即した支援、療育・教育分野との連携（大人になったら）
【高齢者】 症状の自覚の有無、家族関係、地域包括Cや介護保険事業者との連携

◎ 日頃の連携基盤が前提→困難事例のみの連携はあり得ない

28



29

まとめ

- 高次脳機能障害の特性や支援上必要な配慮を、支援者間、事業所間でどのように共有するか、がポイント
- サービス利用に関する枠組み、地域生活支援の枠組みを活用しながら共有し、実践につなげる
- 高次脳機能障害支援拠点の活用が重要
- 「掘り起こし」や「ライフステージ」の視点も重要
- * 特に、「学齢児ならではの」関係者との連携に留意

30

© 厚生労働科学研究：高次脳機能障害の障害特性に応じた支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究班